

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

子どもの学習意欲を引き出す読書活動

横浜市立中村特別支援学校
関戸 優紀子

はじめに

本校は、1982年4月に中村養護学校として中村小学校と併設する形で開校しました。現在では、小学部31名（うち訪問籍2名）、中学部27名（うち訪問籍4名）、高等部16名（うち訪問籍1名）の計74名の児童・生徒が在籍しています。

近くに横浜市立大学附属病院や地域活動ホームがあります。

本校に通う子どもたちの発達段階は、近年多様化しています。教育課程は自立活動の子どもがほとんどですが、知的代替、準ずる教育を行う子どもも在籍しています。興味・関心の幅を広げたい子どもの他に、言葉の習得を目指す子どもも近年増えてきました。

中村小学校と併設されている本校にとって、学校間の交流は、たいへん重要な教育と考え、積極的に行っています。交流によって、本校児童・生徒が受ける影響は大きなものがありますが、中村小学校の児童に与える影響はより

大きなものがあります。

ドア1枚で学校がつながっているので、日常的に自由に学校間の行き来があります。小学生が昼休みに本校の子どもたちにリコーダーの演奏を聞かせてくれたり、本の読み聞かせをしてくれたりすることもあります。運動会や避難訓練などの行事も合同で行います。また、教員間の交流も活発に行っています。

このような環境の中、特別支援学校側は小学生に「何かをしてもらおう」ことが多いのが現状です。そこで、昨年度末にはマルチメディアDAISY図書を使用して、本校中学部の生徒が小学校個別支援学級の児童に読み聞かせを行いました。

また、今年度は昨年度以上に利用者が増えるよう、教員の学習会でわいわい文庫の紹介をしたり、アンケートをとったりしました。

活用の事例

(1) 事例1

中学部1～3年生、小学校個別支援学級児童（2014年3月実施）

①取り組みまでの準備

本校中学部は、ふだんから小学校個別支援学級の子どもたちと交流活動を行っています。そのことから、読み聞かせを聞いてもらう対象を個別支援学級の子どもたちと決めました。

当初は言葉の学習をしている中学部1年生の3名で取り組もうと考えていました。しかし、教室で練習を重ねる中で、自立活動を主として学習している生徒たちもいる多様な実態であるため、クラス全体で取り組むことができないかと方針を変更しました。

本校生徒が児童に読み聞かせ会を通して、それぞれの方法で読み聞かせ活動に参加することで、生徒一人ひとりに達成感や充実感をもたせることを目的とした取り組みを始めました。

本校の言葉の学習をしている生徒の実態としては、つぎの通りです。

A（男子）

文字は読めない。聞いた言葉をはっきりと正確に言うことができる。外国籍の生徒で、日本語を学習中。理解して使える日本語が増えてきた。

B（男子）

内言語が豊か。認知力もあり、質問に答えることができる。発語できる単

語が増えつつある。

C（女子）

ひらがなを読むことができる。気管切開していることもあり、発語が不明瞭。聞き間違えをして間違っていて覚えている単語もある。

Aは昼休みにiPadを使用してわいわい文庫を読むことが日課になっており、本人もたいへん意欲的であること、また、わいわい文庫の本を通して、語彙数がかなり増えていることもあり、Aを柱に活動を考えることにしました。

選書にあたって、まずはいろいろな本をAに読んでもらいました。その中で、昔話は現代では使われなくなった言葉が出てくることがあり、日本語を学習中のAにとっては、日常生活で使わない言葉であることから、不向きであると考えました。あまりにも簡単なものや、ただ聞いているものは、個別支援学級の児童の実態を考えたときに厳しいことから、参加型の読み聞かせにできる『なぞなぞのみせ』を選びました。

そして、12月から『なぞなぞのみせ』の取り組みを始めました。

Aは、iPadにイヤホンをつけ、本人にだけ聞こえるようにして大きな声で読む練習をしました。

Bは「な～んだ？」と問いかける発語の練習と、個別支援学級の児童が聞きとれなかったときに、ヒントが書い

であるボードなどをやりとりのなかで出す練習をしました。

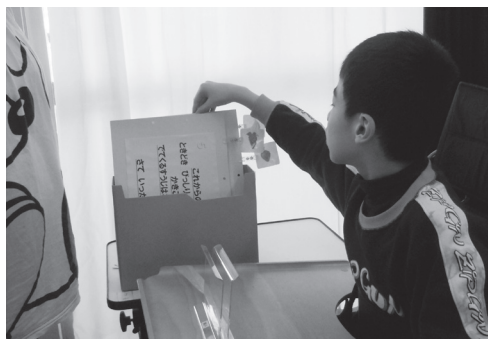


写真1

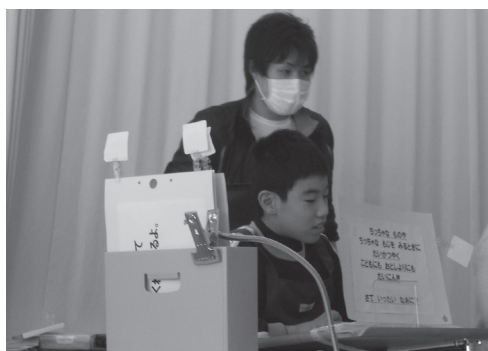


写真2

そして、Cと自立活動中心の生徒たちは、答えが合っているときは○、間違っていたら×を伝える練習をしました。

②読み聞かせ会当日の様子



写真3

当日はお互いに欠席者がいて、本校生徒は中3（男子1名）・中2男子（男子1名・女子1名）・中1（男子2名・女子1名）の計6名でした。個別支援学級からは5名の児童が参加しました。場所は本校1階の教室で行いました。

本校生徒は『なぞなぞのみせ』の店員として、全員で色違いのお揃いのエプロンを身につけて、児童の来店を待ちました。「いらっしゃいませ〜!」の元気のよい声から会は始まりました。読み聞かせが終わり、児童に感想を聞くと、「楽しかった」の他に「ぼくもやってみたい!」という感想が出ました。そして、自立活動を主としている生徒が○や×を伝えるために使っていた支援機器にも興味をもち、児童たちから生徒たちに「これはどうやるの?」「やってみたい!」と尋ねる声が教室中で聞こえました。教室中には満足感、達成感を味わっていると思われる生徒たちの顔がありました。

(2) 事例2

中学部1年生女子D

実態としては、昨年度より昼休みを中心にiPadのボイスオブデイズというアプリを使用して、わいわい文庫の本を楽しんで読んできました。給食が終わると「早く本読みしたい〜!」と言わんばかりに教員を目で追います。発声はあるものの、コミュニケーショ

ン手段までにはなっていません。好きなこと、苦手なことがはっきりしていますが、最近は苦手なことにも落ち着いて取り組む時間が増えています。取り組みの目的としては、大好きな本があるわいわい文庫を通して、身体の動かし方を知り、上手にコントロールして自分から手を動かして操作する経験を積ませたいと思いました。また、発声をコミュニケーション手段として定着できるようにしたいと考えました。

取り組みは毎日行いました。給食が終わり昼休みに入ってから、仰臥位になり本人の顔の真上にiPadを設置しました。側彎そくわんがある生徒なので、なるべく身体をまっすぐに見られるようにしました。

この生徒は、わいわい文庫の中でも好きな本が限定されており、自分の好きな本のときは全身を動かし、「かーっ！」と声を出して満面の笑みで楽しさを表現します。反対に好みではない本のときは無表情になったり、目を閉じたりします。それでも、繰り返し聞くことで好きになることもあったり、興味・関心の幅を広げたかったりするので、いろいろな本を提示しました。

数か月が経った頃、好みではない本を読んでいる最中、右手を上げて、iPadの画面を触っています。



写真4

近くでよく見てみると、何とか自分で操作しようと、一時停止ボタンめがけて手を動かしていました。この生徒は、手で操作しようと頑張ると肩や首に緊張が入り、身体が後ろ側へ引っ張られるようになり、結果として操作がスムーズにできなくなります。しかし、仰臥位で手を上にあげて操作するという身体の使い方を習得しました。

また、発声でのコミュニケーションの学習としては、まずは好きな本を読んでいる最中に一時停止をし、「読みたい人は声でお返事してね」と言葉がけをしました。この生徒の今までの「YES」の返事の手段はニコッと笑うことや手をあげることでした。

しかし、私が再生ボタンを押さず言葉がけを繰り返すと、いい加減うんざりしたように、文句を言うような発声がありました。

そこで、「声のお返事聞こえました！」と言って再生するということをしばらく繰り返し行いました。そして、

「声を出せば始まるようだな」と生徒が理解したところで、つぎは文句を言っているような声ではなく、楽しそうな声を出すよう言葉がけを行いました。

しばらくこのやりとりをするうちに、声を出す前に生徒の舌がよく動くようになり、真剣な表情になってから、とても小さいけれどすてきな声が出ました。「わあ！ いいお返事だね」という言葉がけとともに再生ボタンを押しました。

つぎの段階は大きな声で発声することです。これも繰り返すことができるようになりました。今では昼休みに入ると本読みをしたいことを教員に発声で伝えることもあります。そして、日常生活でも少しずつ発声で返事をする場面も出てきています。授業参観をした保護者が家庭でも発声でのやりとりを試みようと言ってくれ、家庭と連携しながら取り組みは続いています。

このように、わいわい文庫を通して、コミュニケーション手段を広げることができました。このコミュニケーションのやりとりをする中で、何度も一時停止ボタンが押され、今までのように時間いっぱい本読みが楽しめなくなってしまったので、休み時間が終わる少し前からは一番好きな『パパンがパン』を読ませるようにしました。「あなたはだあれ？」や「パパンがパン」

のセリフが大好きです。

よく観察していると、このセリフの少し前から手足を激しく動かして期待している様子がわかりました。そこで、間の時間を1.5秒に設定してみました。すると「くるぞ！」と期待感が強まり、いつも以上に画面を食い入るように見ながら楽しんで聞いていました。思い切って3秒に設定するとさらに楽しさが倍増していました。間が3秒もあると、まさに間延びした感じになってしまいましたが、この生徒にとっては、非常に満足感を得た読書活動になるようでした。

アンケートから見えてきたこと

今年度は夏休み中に行われた教員の学習会の中で時間をもらい、わいわい文庫の紹介を行いました。また、貸し出し用のiPadのケースの中に起動のさせ方などの手引書も入れました。

しかし、まだまだ啓発が足りないため、「使い方がわからない」という意見があがってきました。

また、やはり本校ではパソコンよりもiPadでの利用を望む声が多く寄せられています。各教室へiPadを配布してもらえたら使用頻度が高まるのではないかという意見も多数あがりました。現在、ボイスオブデイズというアプリが入ったiPadの貸し出しは1台であること、また、使用したいという想いがあ

でも貸し出しの場所が教室から遠いなどの声も知ることができました。貸し出し場所については、全校児童・生徒が必ず通る廊下の棚に設置しましたが、貸し出しの方法にさらに工夫が必要であると感じています。

そんな中でも、今年度は、昨年度よりは使用者が増えています。使用目的としては、①視聴 ②追視、ヘッドコントロール ③テンポなどの変化への気づき ④iPadでの学習の経験などが挙げられました。

肢体不自由の学校であるからこそその視点になると思いますが、自動でのページめくりではなく、自分で操作して読み進めることができるようになることを願う声が多くありました。続きが読みたいからこそ、手を動かしてみようという子どもへの動機づけを狙っています。

そこで、iPad上の再生ボタンをスイッチで操作できるようにして、事例2のDで試してみました。ところが、再生ボタンと左右の早送り、巻き戻しのボタンとの間が狭く、上手く再生ボタンが起動できないことが多く、スムーズにできませんでした。早送りや巻き戻しを子どもが操作することはほとんどありません。反対に再生ボタンについては操作のニーズがあるため、再生ボタンだけを大きくすることや、早送り、巻き戻しボタンとの間隔を広

げてあげれば、スイッチと連動が上手くいくと思います。

また、アプリ上で本を選ぶ際に、例えばお気に入りのカテゴリーがあるとか、あいうえお順に並んでいるなど、本の一覧が見やすく探しやすいようになっていると使いやすくなるという意見もありました。

この2点が、利便性の向上につながる課題としてあがりました。

おわりに

今回は、昨年度末の事例と今年度の事例の2つを取り上げましたが、どちらもわいわい文庫を通して学習意欲につながったり、コミュニケーション手段が広がったりと、余暇活動として楽しめたりするものになっています。

また、昨年度よりも利用者が増えた背景としてはiPadの貸し出しを行ったことが理由として挙げられます。昨年度も今年度もCDの貸し出しは行っていますが、教室環境やパソコンの準備を考えたときに、やはりiPadは手軽に気軽に使えます。ボイスオブデイズというアプリを学校にある全てのiPadに入れることができたなら、また、クラスに1台iPadがあれば利用率はグッと上がると思います。利用率が上がることで、さらにさまざまな活用方法で、子どもたちの学びにつなげていけると考えます。